慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	樂翁公傳(澁澤榮一著, 岩波書店發行)
Sub Title	
Author	會田, 倉吉(Aida, Kurakichi)
Publisher	三田史学会
Publication year	1938
Jtitle	史学 Vol.17, No.1 (1938. 8) ,p.140- 141
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19380800-0140

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

らんとした慶應二―三年の敍述にしてからが、專ら表面的事象に壓倒されて、かの問題の『えゝぢやないか』の如きもほんのお副物の程度であり、このあたり著者の言ふ聯關性が甚だ影薄く『封建的日本が、新らしい日本に脫皮せんとする變換時代』と冒頭に大書された我が明治維新が終りに近づくに隨つて政爭臭を增してしまつたことは殘念であつた。

然し、それらは決して著者の眞意ではなく、專ら『維新史を正しく平易に書く』爲の犧牲となつたものであらう。尠くとも從來の二川分流維新史觀等から見れば平易な記述の中にあらゆる方面の史實の聯關性を摘出せんと試みたゞけでも、本書は劃期的「明治維新史讀本」であり「入門書」と賞讃されてよからう。

（高橋磌一）

樂翁公傳（澁澤榮一著　岩波書店發行）

世に德川三百年の政治と云ふことがよく行はれるが、一見してそれは如何にも只平穩安逸にのみ打過ぎたるかに覺えるとは云へ、之が內實に於いては必ずしも高きより低きに流れる水の如く順調に進んだわけのものでは決してなかつた。今改めて此の二百數十年の長き治世を觀みるに、その間稍〻もすれば破滅の既に焦眉に迫らんとするを匡救せる改革の治三度が擧げられるのである。曰く享保の改革、曰く寬政の改革、曰く天保の改革である。人も知る如く、第一の改革は德川幕府中興の祖と仰がれる八代將軍吉宗によつてなされたものであり、第三の改革に臨んだ當事者は濱松藩主水野忠邦であつた。而して第二の寬政の治が奧州白河の藩主松平定信の偉材を待つて始めて效を納め得たことも今更茲に喋々するまでもない。

本書『樂翁公傳』はこの寬政の治の名爲政者松平定信の傳記である。樂翁とは定信の用ひたる號の一にして、早くは四十五歲の頃より斯く稱へたるの例も見られるが、殊に晩年に至りて專ら使用せられたるものの如く、「花月日記」「花月草紙」等にその語義を見ることが出來る。依つて世人多く彼を呼ぶに樂翁公を以つてするのが通例である。

公はもと御三卿の一なる田安家に生をうけ、その身は實に名將軍吉宗の孫にあたる。早くより才識英氣の凡ならざるものを示し、請はれて奧州白河十一萬石の藩主となるや、所謂天明の大饑饉を中心とする藩の疲弊を匡濟して其の治績を擧げ、やがて天明七年六月には衆望を背うて老中首座に推され、更に翌年三月將軍家齊の輔佐たる重職をも兼ね、而して爾來寬政五年七月に職役を免ぜられし時まで凡そ六年間、正に一代の大經世家として誠心誠意只管幕政の振興に盡力したのであつた。而もその時代は恰も世情の最も頹廢し、紊亂を極めた田沼時代の直後のこととて、時代は期せずして公の如き人格經綸共に卓絕せる大人物の出現を要求しつゝあつたのである。從つて此の難局に處する公の覺悟たるやまた壯となすべく、その就任の翌年天明八年正月靈巖島吉祥院の觀喜天へ捧げたと云ふ願文を見ても其の決意の程は察するに餘りがある。而して公はその尊崇する祖父吉宗の、世に享保の治と謳はれて居る善治を以つて專ら範となし、內治外交共に立派な治績を

たてゝ後世その治を讃へて寛政の治と呼ばれるに至り、後の天保の治にあつては之が享保の治と共にその改革の目標とせられたことも人のよく知るところであらう。而も公のかゝる數多の善政の中、今猶ほ吾人の感謝せざるべからざるものの一に七分金積立の制度がある。江戸市中の町入用を緊縮してその結果浮び上つた金額の七分づゝを積立て、之を不時の入用、窮民の賑恤その他の公益事業に當てんとしたものであるが、之が續いて明治時代にまで繼承せられ、當時東京の道路・橋梁・墓地瓦斯等の施設を始め數多の公共的事業は實に此の共有金によつてなされたものであり、更に東京市養育院の設立も亦この資金によつてなつたのである。

本書の著者は恰も當養育院の經營に當たられて居たと云ふ關係もあつて夙に公の盛德を欽慕すること一方ならず、生前には樂翁公遺德顯彰會々長の任にもあつた程であり、遂にその正確なる傳記の編纂を企てられるに至つたわけで、その動機としては、着手當時の世態が今日とは自ら異なつても居た爲か、昭和六年七八月の頃に書かれたと云ふ著者の自序によると、公明正大なる公の遺德を以つて現時社會の弛廢せる人心を矯正せんとするの意圖を含む旨が說かれて居る。併し實はその未だ著者の全希望を滿たすに及ばずして惜しくも遺稿となつてしまつたもので、その稿本が遺志によつて同會に贈遺せられることとなるや、漸く今日玆に本書の刊行を見ることが出來るやうになつたのである。未定稿とは云つても、決して不整備であるのではなく、いま次に目次によつてその內容の概觀を示すならば、緖言の他全卷は十五章に別たれ、公の生誕より卒去に至るまで概して年を追ひつゝ、又いづれかと云へば內より外へと云ふ記述の仕方で、生立と敎養・松平家相續・白河藩治・執政輔佐・施政の方針・財政・財政整理・風紀の肅正・學政・尊王・外交・退職・白河藩治(再び)・文藝・卒去等の各章を含み、之に附錄として詳細なる系譜と年譜とが加はつて居る。その上本文の他二十二葉の圖版にも亦重要にして興味深きもの多く、當時のアメリカ、ロシア、蝦夷等の地圖類や中には公自筆のアルファベットの如きも見られ資料の豐富にして適確なることは、恐らく公に關する從來の著作の遠く及ばざるところであらう。なほ本書の編纂に、三上參次、平泉澄、中村孝也諸博士の關與せることからみて公に關してその人となり、學殖並びに治績などの簡要なる知識を得るためには本書は最適の書といふべく、且つ各章末に參考書名の擧げられて居るのも研究者にとつては誠に親切と云ふべきである。(菊判本文四三〇頁、附錄六六頁、圖版二二葉)

(會田倉吉)

「出島蘭館日誌」上卷 (村上直次郎譯 文明協會發行)

前に「バタビヤ城日誌」を譯出せられた村上直次郎博士は今回本書を飜譯刊行せられるに至つた。

順序として、先づ本書の底本に就いて少々述べよう。原書は Daghregister des Comptorioirs Nangasacgue と稱し、一六四一年六月二十五日(寛永十八年五月十七日)以後歷代の長崎出島に於ける和蘭商館長の手になつた日記である。が、村上氏の今回譯出せられるのは其卷頭の十年間であり、更に刊行せられたのは